

修士論文(要旨)

2016年1月

乳幼児の気質と母親の育児ストレスの関連

—子育て補助器具の使用から—

指導 山口 創 教授

心理学研究科

健康心理学専攻

214J4051

大久保 奈津美

Master's Thesis(Abstract)

January 2016

The Relationship between Infants' Temperament and Mothers' Stress from the
Viewpoint of the Use of Parenting Tools

Natsumi Okubo

214J4051

Master's Program in Health Psychology

Graduate School of Psychology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor:Hajime Yamaguchi

目次

- 1、はじめに
- 2、方法
 - 2-1、対象者
 - 2-2 調査票
- 3、結果と考察
 - 3-1
 - 3-2
 - 3-3
- 4、結論

引用文献

1、はじめに

現代の日本は子育ての難しい環境にあるといわれている。しかしながら、ベビーカー(バギー)やベビゲート、様々な種類のだっこ紐など、育児を補助する用品の発達も多岐に見られ、育児の身体的負担が軽減していることも考えられる。犬飼(1998)によると、母親が子どもを運搬する際一番頻度の高いものはベビーカーで、二番目に高い運搬方法である抱っこはエネルギー代謝率によると比較的負担の高い作業であることがわかっている。しかしこの方法の頻度は、同者の研究内のアンケートによると、子どもの好みにも左右されていることも考えられる。実際、町で乳幼児を連れた養育者を見ると、多くがベビーカーやだっこ紐・おんぶ紐を使用している姿が目に入る。それと同時に、そういった育児補助器具は持っているが使用していない、使用しようとしているが子どもが嫌がって使用できずにいる養育者の姿も見受けられる。そこで、これらの育児補助器具の使用は、乳児の気質によって形式が異なってくるのではないだろうかと考えた。これらのことから、乳幼児の気質と母親の育児ストレスの関連について、特に抱っこやおんぶの観点から明らかにすることとした。乳幼児が身体接触を好む傾向や嫌う傾向を「触覚防衛尺度」で測定した。また、子育て補助器具使用の形式と母親の育児ストレスの関連については、母親が乳児を連れて外出する際に、乳児の気質の特徴によって子育て補助器具の好みや移動手段、また子育て補助器具のなかでも特に多く使用されていると思われるベビーカーの進行方向の好みにもある程度違いが見られるのではないだろうかかと仮説を立てた。

2、方法

2-1、対象者

今回の研究対象者は、三歳以下の乳幼児とその養育者 183 名を対象として調査を行った。対象者の抽出方法は、研究対象者が通っている子育て支援施設の施設長に依頼し、調査協力書と調査票を用いて説明し、施設長に研究協力の了承が得られた施設において調査を行った。

2-2 調査票

三歳以下の乳幼児とその子どもを養育する母親を対象に、乳幼児の気質と母親の育児ストレスの関連及び、子育て補助器具の使用頻度との関連性を明らかにするために質問紙調査を行った。

調査者に関する基本的情報として、①子どもの年齢、②兄弟の有無や家族構成など、③日常場面(家事中や移動中)での子育て補助器具使用状況、④子どもを抱っこすることによって痛みを感じるか、⑤子どもがだっこを好むか否か(母親の主観によるもの)、⑥子どもがだっこを嫌うか否か(母親の主観によるもの)、⑦母親の主観による子どもの移動手段の好み、⑧子育て補助器具を使用したい時に使用できているか、をたずねた。

子どもの気質については、中川・鋤柄が作成した乳児の行動のチェックリストIBQ-Rより、「制限された時の負の情動の表出」「恐れ」「強い刺激を好む」「接触を好む」「知覚的敏感さ」の5つを使用した。

触覚防衛反応については、太田らによる感覚調整障害に関連する行動を評価する行動質問紙「感覚発達チェックリスト改訂版(Japanese Sensory Inventory-Revised : JSI-R)」のうち「触覚」の項目を使用することとした。

育児ストレスについては、日本版 PSI-SF(Parenting Stress Index ショートフォーム)を使用した。

3、結果と考察

3-1、母親の育児ストレスと子どもの気質

子どもの気質の扱いにくさと母親のメンタルヘルスには関連があることは様々な先行研究がなされており、今回の結果も母親の育児ストレスと子どもの気質「強い刺激を好む」及び「接触を好む」因子において弱い負の相関が認められた。子どもをあやしても(刺激を与えても)笑うなどしなかったり、接触を好まない気質が見ら

れる子どもを持つ母親がそうでない子どもを持つ母親より育児ストレスを感じやすいという今回の結果は、先行研究をおおむね支持していることが示唆される。

3-2、母親の主観による抱っこの好き嫌い

母親の主観による抱っこの好き嫌いにおいて、子どもが抱っこを好むかという項目と育児ストレスの合計、子どもの側面因子において弱い正の相関が、また親の側面因子において中程度の正の相関があり、子どもが抱っこを好んでいないと感じる母親ほど、育児ストレスを感じていることが示唆され、育児ストレスが、子どもが抱っこを好んでいないというネガティブな認知の促進要因として働いている可能性も考えることができた。また母親の主観による抱っこの好き嫌いで、抱っこを嫌うかという項目と、子どもの気質「接触を好む」因子に中程度の正の相関があり、子どもが抱っこを嫌がると母親が感じているほど子どもには接触を好む気質が見られにくいといえた。

3-3、子育て補助器具の使用状況

子育て補助器具の使用状況について、屋内のみの場面において、おんぶされることの多い子どもの母親ほど育児ストレスの子どもの側面因子の得点が高いことがわかった。母親が家事を行っている間、子どもが母親との接触を求める(だっこやおんぶされることを求める、近くにいることを求める)ことが、母親にとってはストレスャーとなっていることが考えられる。

4、結論

今回の研究では、子育て補助器具使用の形式と母親の育児ストレスの関連については、母親が乳児を連れて外出する際や屋内における家事での場面に、乳児の気質的特徴によって子育て補助器具使用状況や移動手段に違いが見られるのではないかと、またその使用状況によって母親の育児ストレスにも影響しているのではないかと仮説を立てた。その仮説を支持するとまでは言いにくいですが、屋内における場面での子育て補助器具使用状況や子どもの状況と子どもの気質には差が見られた。また母親の主観による子どもが抱っこを好んでいるか否かという問いと、子どもの気質「接触を好む」因子には相関が見られ、接触を好む気質の見られる子どもほど母親の主観からは抱っこを嫌がっていることに当てはまらないと感じていることや、母親の主観による子どもが抱っこを好んでいるかという問いと、母親の育児ストレスの得点に関連が見られた。

しかし今回の質問紙では、場面ごとの子育て補助器具の使用状況は、母親が望んでいる使用状況であるのか、子どもが好んでいる使用状況であるのか、その場しのぎの状況であるのか、を判断することが難しく、気質的特徴に有意な差が認められたとしても、子どもの気質のみが影響しているとは言い切れなと言えた。そのため、より精度を向上させた質問紙を作成し、再度検討する必要があると考えられる。子育て補助器具の使用状況を問う設問の精度を高めるなど検討を深め、母親の育児ストレス軽減に役立てたい。

引用文献

- Cutrona, Carolyn E. "Causal attributions and perinatal depression." *Journal of Abnormal Psychology* 92.2 (1983): 161.
- Cutrona, Carolyn E. "Social support and stress in the transition to parenthood." *Journal of abnormal psychology* 93.4 (1984): 378.
- Curtrona CE and Troutman BR: Social support, infant temperament, and parenting self-efficacy : a mediational model of postpartum depression. *Child Development*, 57 (6), 1507-1518, 1986.
- 藤岡久美子, 鈴木飛鳥, 「養育者の回想評定による子どもの乳児期の気質と幼児期の社会的行動特徴の関連」. 山形大学紀要. 教育科学 14.3 (2008): 25-35.
- 稲垣恵里(2002). 「子どもの気質的特徴についての研究—母親要因との関連について—」 『心理発達科学専攻修士学位論文概要』, 328-329.
- 犬飼博子. 「子どもの「運搬」における身体的負担」『日本家政学会誌 49』.11 (1998): 1233-1239.
- 一般社団法人 『PSI 育児ストレスインデックス手引き 2 訂版』 雇用問題研究会、2015
- 厚生労働省. 「平成 16 年版労働経済白書 『ぎょうせい』」. (2004).
- 厚生労働省. 「地域子育て支援拠点事業について」, 『地域子育て支援拠点事業とは』.
- 日下部典子, 坂野雄二. 「育児に関わるストレスの構造に関する検討」. 『ヒューマンサイエンスリサーチ 8 』 (1999): 27-39.
- 草薙恵美子, 星信子, 陳省仁. 「子どもの気質発達についての学際的研究: 予備調査をふまえて」. 『國學院大學北海道短期大学部紀要 31』 (2014): 11-27.
- 草薙恵美子. 「乳児の気質の構造: 情動表出傾向及び接近傾向における一考察」. 『発達心理学研究 4.1』 (1993): 42-50.
- 牧野カツコ. (1982). 「乳幼児を持つ母親の生活と育児不安」. 『家庭教育研究所紀要 3』, 34-56
- 三上光代, 高嶋 明美, 白川 幸代, 藤本 寛巳, 牧野 雅美, 山田 直江. (2010) 「ボディコンタクトが母親にもたらす心理的効果」『新田塚医療福祉センター雑誌 7』 11-14.
- 三谷明美, 田中マキ子. (2012) 「ベビーピクスが母親自身に及ぼすストレス反応の検討」 『山口県立大学学術情報 5 』: 73-77.
- 中川敦子, 木村由佳, 鋤柄増根. 「乳児の行動のチェックリスト (IBQ-R) 短縮版の作成」. 『人間文化研究 12』 (2009): 15-25.
- 中谷奈美子・中谷素之 (2006). 「母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響」. 『発達心理学研究, 17(2)』, 148—158.
- 奈良間美保, (1999) 「日本版 ParentingStressIndex (PSI) の信頼性・妥当性の検討」: .
- 奥村ゆかり・松尾博哉 (2011). 「ベビーマッサージが母子双方のストレス反応に及ぼす効果に関する研究」. 『母性衛生, 51(4)』, 545—556.
- 太田篤志, 土田玲子, 宮島奈美恵. 「感覚発達チェックリスト改訂版 (JSI-R) 標準化に関する研究」. 『感覚統合研究 9』 (2002): 45-63.
- 佐藤達哉 (1994). 「育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連」. *心理学研究*, 64(6), 409—416.
- 清水嘉子・西田公昭 (2000). 「育児ストレス構造の研究」. 『日本看護研究学会雑誌』, 23(5), 55—67.